

遊戯王ARC-V get back in the game

眉キ一

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シンクロ次元で11ヶ月に渡って大活躍した例のあの人のリベンジ奮闘ストーリー。文章リハビリを兼ねた不定期更新。

マスタールール3、カード効果はOCGに寄ります。

感想いつもありがとうございます。

## 目次

第一章	常盤色の光の中で	1
第一章	常盤色の光の中で	2
第二章	地下と道化師と	8
番外	デユエリストクラッシュャーVS天翔ける隼	12
第二章	地下と道化師と	20
番外	デユエリストクラッシュャーVS天翔ける隼	22
第二章	地下と道化師と	26
第二章	地下と道化師と	30
番外	デユエリストクラッシュャーVS天翔ける隼	35
第二章	地下と道化師と	41
第二章	地下と道化師と	43
幕間	移動中	47
第三章	シテイの新たなる夜明け	50
第三章	シテイの新たなる夜明け	53
番外	セルゲイ VS デイアブロ ハイウェイの死闘	57
番外	セルゲイ VS デイアブロ ハイウェイの死闘	60

## 第一章 常盤色の光の中で

空に光る緑の裂け目が、私の身体を飲み込む。  
水に溺れるような感覚が、肺を満たしている。

ー息が、僅かにしか出来ない。

私がこの世界を。この次元をー統治しなければならぬというのに。

【憎い……憎い憎い憎い！】

指が……動かない。

私の計画はー何処で崩された？

ランサーズ。赤馬 零児。榊 遊矢。ジャック・アトラス。全部奴等が悪いのだ。

奴等の様な気品も知性も何一つない、人畜同然の凡俗め。

叶うならばーもう一度、合間見えてやりたい。

そしてー形すら残さぬよう、粉碎をするのだ。

怒りは高ぶれど、周囲の景色は、前面深い緑の光のまま。

ー此処は、空気も薄いようだ。

……幾ら私でも、死にたくはない。名声も遺せぬままーこんなところ。

急激に目蓋が重くなる。

いや、朽ちてーたまる物か。朽ちてーたまるものかあ……！

「私は……死なん……！ 絶対に……死なん！」

力の限りに目を開く。その瞬間ージャン・ミシエル・ロジエは光の中に、こちらへ向かってくるカードの束を見た。

「あれは……カード？」

空間の中に、カードが流れてきている。

なんでこんなところに？ 神がいるというのなら……私を嘲笑う

つもりか？

残った僅かな力で、片手でカードを掴む。

この私への……冥府への渡し賃と、いう事か？  
その瞬間、カードから光が発せられた。

「……これは!？」  
私が驚く間もなく、私の体は光によって跡形もなく分解された――。

「――長官。長官!」

「――はっ!？」

何者かの声で、突然目が覚める。

「スピードワールドネオ・展開完了しました。逃走中のDホイールとのリンクを確認しております」

オペレーターの声だ。――どういった事だ。私は死んだはずでは――?

「――逃走中? コースは?」

訳のわからぬままに、オペレーターに問いかける。

「トップスの別荘地区からシティ中心にかけてSTC06ルートです」

モニターに写るのは、白いDホイールと、それを負うデュエルチェイサー2227だ。

あの男……覚えがある。

「……まさか、戻って……いる?」

ぞつとした感覚を背筋に覚えて顔に手をやろうとした時、  
右手に違和感を感じた。

【カラクリ將軍 無零】

ほかにも何枚か無造作に握られたカード。

あの時咄嗟に掴んだ、カードだ。まさか、夢ではないと?

暫く茫然としていると、再びオペレーターに催促される。

「長官、デュエルチェイサー2227への指示はどうされますか?」

「……彼に好きにやらせなさい。無論周囲の手の空いているデュエル

チエイサーは、万が一の

「事があつた時の為に急行させておくこと」

苦虫を噛み潰したかのような表情になりつつも、私はそう指示して席から立ち上がる。

どうせ227が勝てないと分かっているからではない。

これは……チャンスだ。チャンスなのだ。

一度失敗した私の野望に、火がついた。

……恐らく既にランサーズはこちらにきているはず。ならば、お楽しみはこれからだ。

改めてデツキを構築し——今度こそ赤馬零児をこのシティから葬り去る！

私のシティで狼藉を働くものなど……完全に潰すのみだ。

心なしか、握り締めた拳に不自然に力が入るのを……感じた。

今日はもう退勤だ。家に帰って久しぶりに……デツキケースを開けるとしよう。

## 第一章 常盤色の光の中で―2

公用車で帰宅して使用人に食事の用意をさせておき、私はバスルームへ向かう。

屋敷の湯船は既に、赤い着色で満たされていた。

……私好みの、天然の入浴剤だ。シテイ……トツプスの中でも、限られた人物しか手にする事が出来ない品質のものだ。

湯船から手で、湯を掬う。

いずれ赤馬零児、そして零王もこの湯のような赤い血に沈めてやる。

鏡に映った自分の顔が、笑みを浮かべているのが分かる。だが、油断はならないのは事実だ。

……赤馬零児。奴は前の世界でシンクロ召還とエクシース召還、さらに融合召還に加えてペンデュラムまでを操っていた。

だが私とて多少の腕には覚えがある。アドバンスと融合、そしてシンクロ召還までは自己評価で甘く見ても100点中の98点は出来ていると考えがある。

しかし……それでは、足りない。全く足りないのだ。不服かつ、業腹だが、エクシースとペンデュラムについてはほぼ全く、仕掛け以外は私には分からないと言ってもよい。

此処はどうするべきか。

……以前の世界のタイミングでは、確か地下デュエルでエクシースを行う者が現れた記憶がある。その後、フレンドシップカップへのスケジュールが密接に組み込まれていくことになったはず……。

一応前もって老人たちにマークは付けておいたが、どうやら赤馬零児は既にこの次元にいて、奴らと接触したと見える。ならば……始末は既に不可能と見る。

……作戦変更だ。セルゲイを―セルゲイ・ヴォルコフを、このタイミングで使わせてもらおう。

やるならばあそこ、地下デュエル、そこにセルゲイを使うのだ。

前の世界では奴はキングに感化されて心を持った後に無様にもコ

モンズの虫に破壊されてしまったがーこの世界で私の右腕になるに相応しい能力が奴（セルゲイ）にはある。だから、奴をキングにぶつけるのは見送るしかあるまい。それに……方が一にでもユーリが来た場合、戦うならばセルゲイしかないのだから。

……今この私が考え付く最適解。

ギアラガーに連絡を取らせ、地下デュエルに介入。そこでセルゲイを使いエクシーズの力を男から聞き出し、ランサーズを解体させるー。運がよければ私にエクシーズを扱う力が備わり、さらに過剰なるほどに私自身が完全無欠となるのだ。

……どうせ終 柚子はすぐにフレンドシップカップに来る。今度こそ私の勝ちが決まる。全て私の掌の中だ。

「フフフ……ハッハッハッハッハ……！」

愉快になってくるが、笑ってばかりではいられない。カードの研究もしなければならぬ。セキュリティのデュエルチェイサーにも支給カードを増やし、サイドデッキの選択権利を与えなければ。

ペンデュラムが魔法カードの一種なのは分かっている。魔法効果の矢をまず投入させ、ほかに……サイクロン、魔封じの芳香、封魔の呪印。なにがなんでも潰さねばならぬ。

色々と対策を考えているとシンクロ次元に来たばかりの事を思い出す。

闘争、他人を蹴落としてでも這い上がらなければならないような過酷な競争。情報アドバンテージ、他人を出し抜く力。

ーこれだ。久しぶりに忘れていた、人間が生きようとする力の大切さを。

未来よ、幾らでも私の前に立ち塞がるがいい。全て粉碎してくれ

る。  
私は密かに、ほくそ笑んだ。

バスルームから戻ると、治安維持局からの連絡が入った。

なにやら通信報告によれば、デュエルチェイサー227はやはり敗れたとの事だ。

「……一応今回も彼は確保しておくでしょう。榊遊矢相手には遅れをとったが、温存しておけば」

奴はオベリススクフォース相手には役に立つだろう。

「……」

鍵を手に取り、貴重品を保管してある自分の机をそつと開ける。私はアカデミアの印の入ったデツキケースを手にとった。

「……ずつしりと重い、デツキ。【古代の機械】という。」

私の原点であり、アカデミアの魂——それであり、内心嫌っていて離れたくもあつたデツキだ。

だが、あの時 ランサーズ……そして赤馬零児相手にこのデツキを使つてしまった。本来はシンクロデツキを使うべきところを。

それは即ち、私自身がアカデミアと決別したつもりでいて、それでも過去を振り切れていないということだ。

「……今は使える知識を総動員して別のデツキで間に合わせるとして、エクシードとペンデュラムを修得した後は……いずれはこのデツキを改造し、私の魂の進化を世界全てに魅せつけるしかあるまい。赤馬零王を討ち取るのは、このデツキを新生させた超アンティークだ。」

新生したこの私、ジャン・ミシエル・ロジエの至高で強大なる力が、奴らを跡形もなく葬りさるのだ。

「……明日はプロモーターのギャラガーがデニスを見つけるといった時分だな……奴を通して、やれる事がある」

時間は有限だ。動けるうちに動く、その信念こそが私をこの長官の地位までのし上げてきたのだ。

シテイ最大のデュエル大会……フレンドシップカップの9戦目、そこに炎城ムクロとかいう奴ではなく、セルゲイをぶつける。

本当に扱い辛いあの馬鹿者だが、お前の好きな美しい者が見付かる  
かもしれないとでも言っておけばとりあえずは動かせるに違いない。  
その隙を狙い、私がデニスと接触すればー。

## 第二章 地下と道化師と

地下デュエル大会、9戦目――。

「先行は貰った！ 俺はRRーバニシング・レイニアスを召喚！ さらにその効果を使い手札からRRートリビュート・レイニアスを特殊召喚！ その効果でデッキから墓地にRRーミミクリー・レイニアスを墓地に送る！ 墓地のミミクリー・レイニアスを除外し、RRーコールをデッキから手札に加える！ さらに、自分の場にRRが二体以上存在するとき、手札から永続魔法、RRーネストを発動！ デッキから、RRーブースター・ストリクスを手札に加える！ そして、場の二体のRRでエクシーズ召喚を行う！ 冥府の猛禽よ、闇の眼力で真実をあばき、鋭き鉤爪で栄光をもぎ取れ！ エクシーズ召喚！ 飛来せよ！ ランク4！ 《RRーフォース・ストリクス》！ 俺はフォース・ストリクスのオーバーレイ・ユニットを取り除きデッキから鳥獣族・闇属性・レベル4のモンスターを手札に加える！ 俺は二体目のRRーバニシング・レイニアスをデッキから手札に加える！」

フィールドでは、私のセルゲイ相手に黒咲 隼が早速、フィールドで猛展開をしている。全く、なんとというデッキの回りようだ。まさに、疾風迅雷の如しといったところか。

……やれやれ、私が学生の頃の時代では精々2体モンスターが並べば驚かれたものだというのに。

「お時間を頂き、ありがとうございます。いやいや……凄いですね、レイドラプターズ……いや、エクシーズ召喚というものは。あんな素早いデッキは、私がこの年齢まで生きてきて今まで見たトップ3に確実に入りますよ。あれだけ動いて、手札を全然減らさないと……流石です」

会議室の一室を貸し切り、デニスと無事に面会をセット出来たのは僥倖だった。

――私は少し大きさに驚く演技をしたが、これでは不自然そうには見えまい。こんな場なのでいつもの服ではなく目立たないコート姿

で来るしか得なかったが、権現坂くんという大柄なお付きにはギャラガーがひつついている。場を開けてくれていて今しか大局的な勝ちへの仕込みはない。デスクで駒を触っている時間を現場に回せば、こゝも有益に使えるのだ。

「……そうですね。ボクが思うところ確かに彼は……黒咲は、強いと思いますよ。あの屈強な挑戦者も見た目からかなり場慣れしているように見えますが、彼には勝てないとおもいますがね」

デニスはこちらを不審がっているのか、やや距離を置いた様子で話しかけてきた。

だが、今のところは――私の真意はばれてはいないはずだ。

「……君も使うのでしょうか？ エクシーズ召喚を」

私は我ながら完璧な声色で、デニス君の表情を伺う。

彼には私の事を、市の支配階級――トツプスの一人、とだけ伝えてある。

「ええ、確かに僕もエクシーズ召喚を使えます。まあ彼と違って、それだけが主軸ではないんですけどね」

「それは素晴らしい。一体――何処でそのような技術を？」

「貴方は信頼できそうですから言いますが――僕らは訳あって別次元からきて、仲間を探しにきたんですよ。そして、この次元の強いデュエリストをスカウトしてきました」

デニスはそう説明してくる。――予想よりも頭の回転の早い子供のような。油断はならんな。

「――そうですね。でしたら、私が約束をしましょう。あなたの仲間を絶対に保護すると。この私、ジャン・ミシェル・ロジエはこの街では単なる警察の役目をしている程度で地位はそれほどではないですが、君達の自由を保障させるくらいはできますからね」

彼に太鼓判を推してやると、デニスは安堵したような表情になった。少しは警戒心を削げたか。

「分かってくれて助かります。ただ――僕一人に面会だなんていうから、少し警戒しちやいましたね。なんとなくですが」

「いえいえ、とはいえ今回の件、こちらでも治安を維持しなければならな

いのでそこところは事情と分かってく下さい。万が一にもアナタたちが危険組織であれば拘束せねば、とまでの意欲で正直きたもので」

やや弱気がちに見せかけつつ、そう意思を表明しておく。

「分かりますよ。突然怪しい召喚を使うような人間がくれば、それはボクだって警戒するでしょう」

話に分かる。ーーよし、本題だ。

「恐れ入ります、デニスさん。ところでーー貴方は強いデュエリストを探していると言いましたね。私もあなたの活動を援助したいとは思っていますがその代わりーーエクシーズの力を私や私の部下に指南願えないでしょうか？ 日に日に凶悪化するコモنزを取り締まる為にも、是非、とおもいました」

「エクシーズ召喚を？」

「ーー実戦も、兼ねて。 とりあえず、この私自身でも体験してみたい。ーーどうですか？ 公園で放送されていたあなたの大道芸も、この目で間近に見たいと思っていましたのでね。……ああ、御心配なく。鑑賞料として心ばかりですが一週間分ほどは食事に困らない程度のお金は私のポケットマネーで用意しております」

こちらのセキュリティのディスクを、出す。流石にこんなところでアカデミア仕様のディスクを出してはただの馬鹿だ。

「……確かに、人が集まれば食事代も馬鹿になりませんからね。日銭は大切だし、分かりましたよ。いいでしょう、よく見ておいてくださいね」

デニスがデツキを用意したーー。此処から私の、運命を変える戦いが始まるのだ。

悪いがーー私の餌食になってもらう。《古代の機械混沌巨人》を取り上げ、我々の手で解析もせねば今のアカデミアの対策は辛いからな。

会議室の机を少しどかし、ある程度動きやすくさせてからディスクを構える。

ーーそういえば、彼らが扱うのはアクションデュエルとかいうのも

あるのだったな。地縛カードを超える物も開発できれば良いに越したことはないが……時間が間に合うか、分からん。

『フィールド魔法発動、クロスオーバー』

彼のディスクから、自動で魔法が発動される。

アクシオンカード、か。動き回るのは好きではないが……やるしかないだろう。

「お手柔らかに、デニス君」

「……こちらこそ。観客がいないのが残念ですが……よろしくお願ひしますよ」

目の前の道化師は、少しだけ笑った。……さて、化かしあいといきましようか。

『「デュエル！」』

## 番外ー デュエリストクラッシュャー VS 天翔ける隼

それは、ジャン・ミシエル・ロジエがデニス・マックフィールドと会議室でデュエルを始める少し前ー。

「黒ー咲！ 黒ー咲！ 黒ー咲！」

相手の応援が轟くアウェイな環境で、セルゲイ・ヴォルコフは既に自身のDホイールに跨り、サーキットのスタートレーンで口に笑みを称えていた。

ロジエに聞けばこの相手は既に今日までに8連勝をしているという。 ……なるほど、中々に噛み具合が良さそうな相手だ。 絶好の ……獲物でもある。

「 ……貴様が、セルゲイ・ヴォルコフか。 このシテイを震えさせた犯罪者であったと言うが ……本当か」

鷹を思わせる鋭い目をした男ー黒咲が、ゆつくりとDホイールを止めて横から話しかけてきた。

「 ……そうだ」

その顔を観察するかのようにセルゲイは見ると、また前に向き直る。

20もいかなない年齢だが ……コモンズで一般的に見るような低質のライダースーツではない。 そこそこのスポンサーがついていると見える。

「 ……娑婆にでてきたところで悪いが、俺は加減をする気はない。 怪我をしたくなければ引つ込むんだな」

黒咲はそうとだけ言うと、自身の準備が終わったと手でスターターに合図を行った。

そろそろ、開始のようだ。

ー今回もいつものように、第一コーナーを制した方が先行というルールだ。 ただ、まだ此処は9回戦目なのでライフについてはお互い

4000制となっている。

『それでは、デュエルを開始します！ 両者スタート用意！』  
サーキットのBGMが変わると同時に、観客が黄色い歓声で盛り上がり始める。

此処は賭けデュエルの場だ。オッズは知らんが、今も相当の金が飛び交っているだろう。

デュエルモード、オン！ オートパイロット、スタンバイ！

フィールド魔法発動！ 《スピードワールドネオ！》

走るデュエルディスク……Dホイールから魔法が発動されレーンの周囲が、光に包まれた。

3！ 2！ 1！ ……

カウントが始まり、こちらもエンジンを吹かさせる。

いつ聞いても、この電子音声……悪くはない感覚だ。

『デュエル！』

黒咲がロケットスタートを決めたが、セルゲイはその後に続いた。

「ーほう、出来るな」

走り出してすぐに、セルゲイは少し、驚いた。

黒咲という男は……見た目より軽いと見える。 ほぼこちらがトップスピードでいるというのに、差が、縮まらないのだ。 Dホイールの出力がレギュレーションで決まっている以上、大柄なセルゲイは成人男性を大幅に上回る自身の体重もあり、直進における加速性能において不利を背負う。

……ストレートでは抜けんか。

とはいえ、時速160kmを超える世界でのバトルだ。ドライバーが人間である以上、レースですら何かしらのミスをするというのにデュエルをしながら走るのでは最適な走りは出来ない。

それ故に、セルゲイには付け入る隙があった。

黒咲／LP4000      セルゲイ／LP4000

第一コーナーは、黒咲が、制す。

先行権をとった瞬間、軽くガッツポーズを黒咲がしたのを、セルゲ

イは見逃さなかった。

「先行は貫った！ 俺はRRーバニシング・レイニアスを召喚！ さらにその効果を使い手札からRRートリビュート・レイニアスを特殊召喚！ その効果でデッキから墓地にRRーミミクリー・レイニアスを墓地に送る！ 墓地のミミクリー・レイニアスを除外し、RRーコールをデッキから手札に加える！ さらに、自分の場にRRが二体以上存在するとき、手札から永続魔法、RRーネストを発動！ デッキから、RRーブースター・ストリクスを手札に加える！ そして、場の二体のRRでエクシーズ召喚を行う！ 冥府の猛禽よ、闇の眼力で真実をあばき、鋭き鉤爪で栄光をもぎ取れ！ エクシーズ召喚！ 飛来せよ！ ランク4！ 《RRーフォース・ストリクス》！ 俺はフォース・ストリクスのオーバーレイ・ユニットを取り除きデッキから鳥獣族・闇属性・レベル4のモンスターを手札に加える！ 俺は二体目のRRーバニシング・レイニアスをデッキから手札に加える！ 俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

コースをリードしつつ走る黒咲。初動のラッシュを終えて尚、手札は4枚。

(守) RRーフォース・ストリクス ランク4／闇属性／鳥獣族／攻  
100／守2000  
セットカード 1 場 RRーネスト  
手札4

「フン……今のところは脅威は感じないが……面白くはあるな」

Dホイールを駆るセルゲイは、その後ろを追走していく。

ロジエに半ば無理やり連れてこられた地下デュエル場……普段は碌なことを言わないアイツの命令だが、決闘者の勘も後押ししたので素直にこちらに来てみたら、今回は当たりのようだ。

ただ、融合は使うなど嚴重に言われて妙なデッキを渡されたのは……気に入らんが。

本音を言えば、簡易融合すら使うなど言うのはとても気に入らん。――まあ、いいだろう。美しくなければ速攻で潰すのみ。美しけ

れば……丁寧到手折ってやるのみだ。

「ドロー！」

セルゲイのドローの衝撃で、車体の後ろに風が巻き起こる。

「俺は魔法カード《エネミーコントロール》を発動する。これによりお前のモンスターの貧小なフォース・ストリクスは攻撃表示になる！その100のボディを晒すがいい！」

「何ッ!？」

黒咲の驚く声。流石に表示形式を変えられる事は、予想していなかっただろう。

「俺はさらに、手札から魔法カード《光神化》を発動！手札のゼータ・レティキュラントを特殊召喚する！」

ゼータ・レティキュラント

星7／闇属性／天使族／攻2400／守2100

(1)：このカードが墓地に存在し、相手フィールドのモンスターが除外される度に発動する。

自分フィールドに「イーバトークン」(悪魔族・闇・星2・攻／守500)1体を特殊召喚する。

(2)：このカードは自分フィールドの「イーバトークン」1体をリリースし、手札から特殊召喚できる。

「……上級モンスターをリリースなしで特殊召喚か」

黒咲は白紫の獣……ゼータ・レティキュラントを見て今度は然程脅威ではないといった様子で、呟く。

「この程度ではない。さらに緊急テレポートを発動！デッキから、レベル1チューナーモンスターのリ・バイブルを特殊召喚！」

召喚に応じ、青い本が、フィールドに降り立つ。

「さらにチューナーモンスターだと？」

《7+1》

「心の闇より生まれし者、今、魂と引き替えに降臨するがいい！シンクロ召喚！脈動せよ、《ブラッド・メフィスト》！」。

ブラッド・メフィスト

星8／闇属性／悪魔族／攻2800／守1300

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

相手のスタンバイフェイズ時、相手フィールド上に存在するカード1枚につき相手ライフに300ポイントダメージを与える事ができる。

また、相手が魔法・罫カードをセットした時、相手ライフに300ポイントダメージを与える。

「バーンを内蔵したモンスター……？ それに2800とは、鬱陶しい……」

「フフ……攻撃表示のシンクロモンスターが召喚されたな。だが……貴様。貴様はまだモンスターを通常召喚していないことに気付いているか？」

「……っ」

黒咲の目付きが変わる。

「思い知らせてやろう！ 俺は《カラテマン》を召喚！」

星3／地属性／戦士族／攻1000／守1000

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、元々の攻撃力を倍にした数値になる。この効果を使用した場合、このカードはエンドフェイズ時に破壊される。

セルゲイのフィールドに、胴着を纏った男が現れる。

同時に黒咲の表情が歪んだ。

「カラテマンだど!? そんな弱小モンスター……ふざけているのか！」

「……俺は全く、ふざけてなどいないな」

……ふざけているのは、こんなデッキを渡したロジエだ。

「カラテマンの効果発動！ カラテマンの攻撃力はエンドフェイズ時まで、元々の攻撃力を倍にした数値になる！ この効果を使用した場合、このカードはエンドフェイズ時に破壊される！」

「うおおお！」

カラテマンの身体がパンプアップされ、一回り身体が巨大になる。

「これで合計攻撃力は4800となる。あっけなかったな」

セルゲイはそう告げつつ、黒咲を静かに見る。

「ーいや、だがこの程度で終わってもらっては困る。もっと味あわせろ、貴様を。」

「バトルフェイズに入る！ カラテマンで貴様の攻撃力1000のフォース・ストリクスを破壊する！ 暗黒空手で葬ってやるがいい！」

全身の筋量を増大させたカラテマンが、フォースストリクスに迫る。これが通れば1900の大ダメージとなる……だが、攻撃は中断された。

「……ッ！ させるか！ 俺は手札のブースターストリクスを除外し、効果発動！ これを対価に貴様のカラテマンを破壊する！」

カラテマンが爆散する。ーなるほど、凄いだけ。だがー甘いな。

「……俺を止めた、と思ったか？」

「何？」

黒咲が顔を顰める。

「……フィールドのモンスターが破壊された時、俺は手札の機皇帝ワイゼル∞を特殊召喚させてもらう！」

セルゲイは片手で、Dホイールのパネルを叩く。

同時にソリッドビジョンから5つのパーツが飛び出て巨大なる白銀の機械が出現し、無機質な赤い目が黒咲を見た。

機皇帝ワイゼル∞ 星1 攻撃力2500

「……こいつッ」

古代の機械と似ている、そうとでも思ったのだろうか。

「バトル続行！ 機皇帝ワイゼルの攻撃！ ステンレス・スチール・スラッシュュ！」

ワイゼルの手が刀と化し、フォースストリクス……そして、黒咲を襲う。

「ぐおあ!!」

黒咲LP4000↓1600

大爆発が起こり、黒咲のDホイールが減速する。

「獲ったぞー」

その瞬間を狙い、セルゲイはホイールを急加速させ抜き飛び出した。

「……しまった!」

「フフフ……一瞬とはいえ油断するとは美しさが足りないな。機皇帝ワイゼルのデメリット効果により、ブラッド・メフィストは攻撃する事が出来ない。故にターン……」

「待てー」

黒咲は、言葉を遮る。

「何だというのだ?」

セルゲイは、不審げに黒咲をみやる。だが、黒咲は不敵な表情をしてきた。

「忠告は聞いておこう。だが、俺には戦う手は残されている……!」  
俺は速攻魔法ーRUMーラプターズ・フォースを発動! 自分フィールドの「RR」Xモンスターが破壊され墓地へ送られたターン、自分の墓地の「RR」Xモンスター1体を対象として発動できる! そのモンスターを特殊召喚しー」

「無駄だ、機皇帝ワイゼル∞の効果発動! 1ターンに1度、相手の魔法カードの発動を無効にし破壊することができる! つまり速攻魔法であろうと無駄だ!」

言葉を中断させると同時にワイゼルの手から光が発せられ、瞬時にRUMのカードを貫く。

「何だ?!」

「さっきの攻防、瞬時にカラテマンの攻撃に対応し、ブースターストリクスの効果を使ったところは褒めてやろう。あれがなければ貴様は続くブラッド・メフィストの2段攻撃を受けて即座に倒れていたはずだ。ただ、もつとも今の攻撃を止めなくてもカラテマンの自壊チェーに反応し、俺はワイゼルを特殊召喚するつもりではいたがな」

「……何を偉そうに」

顔を歪める、黒咲。

「フーフフ。強いて言うのならば、カラテマンは見逃してブラッド・メフィストの攻撃に合わせて魔法を使うべきであったか？」

「……黙れ！ 俺に指図するな！」

「フン……勘違いするな。俺はこんなつまらない勝負で終えたくない、というだけだ。貴様の手札は3枚……次のターンどうするか、見ているやろう。勝とうとする執念は認めるが……美しくあがいて見せるのだな」

セルゲイはパネルをタッチし、エンドフェイズを宣言した。

セルゲイLP4000 黒咲 LP1600

黒咲 隼 手札3 場 0 バック RRーネスト

セルゲイ 手札0 場 ワイゼル ブラッド・メフィスト バック

0

## 第二章 地下と道化師と―2

「フィールド魔法、クロスオーバー。そのカードがフィールドゾーンに存在する限り、アクションカードを使用できる。フィールドに散らばったアクションカードは1枚しか同時に手札に加える事ができない。基本的にアクションマジックは速攻魔法として考えて貰っていい……ま、こんな事ですかね」

デニスはその笑いながらも、私の方を見る。

「成程。これは画期的なデュエルですね」

相槌を打つ。なるほど、理屈は理解できる。プレイヤーの身体能力にかなり影響されるデュエルという奴か。……しかしまあ、動きやすい恰好できたからいいものの、いつもの服だったら走り辛くて大変そうだ。アカデミアで鍛えた身体能力はあるが、正直運動能力は昔と比べて相当落ちている。アクションデュエルをするならば、それこそ私も肺活量を増やすために水泳でもやるべきか。

「では、ディスクの決定ではあなたが先行だそうなのでお先にどうぞ、ミスターロジエ」

デニスは含みがありそうな顔でそう告げた。

「分かりました、では、お手柔らかにどうぞ」

――いいだろう。この戦い、融合またはフュージョンと名のつくカードなしでやってやる。

私はわざと素人くさく、ディスクを構える。

「私のターナー！ 忍者マスター HANZOを召喚！」

星4／闇属性／戦士族／攻1800／守1000

このカードが召喚に成功した時、

デッキから「忍法」と名のついたカード1枚を手札に加える事ができる。

また、このカードが反転召喚・特殊召喚に成功した時、

デッキから「忍者マスター HANZO」以外の

「忍者」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

ディスクをタップすると同時に、忍者がフィールドに降り立つ。

「w a o！ ミスターロジエは忍者使いだっただんですか？ ボクの知り合いにも忍者がいるけど、そのモンスターは見た事ないですよ！」  
合いの手を入れてくるデニス。

「ありがとう。でも、私はまだ召喚しただけだからね。ー私は忍法変化の術をデッキから手札に加えさせてもらおうよ」

サーチし、さらに2枚セット。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

私のデッキは忍者デッキではない。だが、まずはこれで様子見だ。エンタメイジとやら。セルゲイの戦う黒咲のRRとは違った強さを、解析させて貰おうー。

私は、緊張した面持ちでターンを終了した。

しかしーセルゲイの方がやや気がかりでならない。はたして上手く奴は、やれているだろうかー？

悪い病気が、出なければいいのだが。

## 番外—— デュエリストクラッシュヤー VS 天翔ける隼——2

「俺のターン！ ドロー！」

サーキットを既に1週したが、黒咲がすぐさまこちらに追いつてきた。……成程、こちらの背後に回り風の抵抗を避けるか。

……だが。

「この瞬間、ブラッド・メフィストの効果が発動する。貴様の場にRーネストがあるので300ダメージだ！」

「ツハア！」

セルゲイが叫ぶとブラッド・メフィストの構える髑髏の杖から光が発せられ、黒咲のDホイールに直撃する。

「ぬううツ！」

黒咲LP1600↓1300

減速させまいとバランスを取り、歯を食いしぼる黒咲。だが、その目から闘志は消えていない。

観客も今の効果には、驚いたようだ。

フフフ……ならば、揺さぶってやる。

「……貴様。お前は今、どうモンスターを特殊召喚させようか考えている。違うか」

「……さあな」

ぶつきらぼうに黒咲が答えるが、凶星らしい。

奴の手札の4枚のうち、一枚はRRーバニシングレイニアス。そして魔法のRRーコールがあるのは確定だ。だが、展開する為のRRーコールを撃つには、こちらのワイゼルの効果をくぐらねばならない。……そして、こちらがとめられる魔法も一枚きり。つまり、精神勝負だ。

奴の心拍数の上昇が分かる。

「……さあ、貴様はどう動く！」

セルゲイは凄み、煽る。　だが黒咲は迷いなく、手札を振り下ろした。

「ーー決まっている、俺はRRーバニシング・レイニアスを召喚！」  
「ほう、また同じ手か！」

「さらに俺は、手札のRRーファジー・レイニアスを場のRRがいることにより自身の効果で特殊召喚、さらに二体フィールドにRRが居ることにより、発動済みの場のネストの効果をつかう！」

「……既に貼られた永続魔法は、機皇帝ワイゼルの効果では止められない……なるほどな」

「セルゲイと言ったな。今度は俺の番だ。さあ、俺の行動を、何処でとめるかかけてみる！　俺はネストで、デッキからRRーネクロ・ヴァルチャーを手札に加える！」

「ほう……なるほどな」

「まだ止まらんぞ！　俺はさらに、成金ゴブリンを発動！　手札を補充させてもらう！」

「……その効果は止めはせん、好きにしろ」

セルゲイLP 4000↓ 5000

「俺は、ネクロヴァルチャーをバニシング・レイニアスの効果で特殊召喚し、さらにRRーコールを使う！」

……奴の手札は残り一枚……つまり、残りがRUMか。だが、此処で止めねばまたもやフォース・ストリクスを作られる。

「いいだろう、黒咲！　俺は機皇帝ワイゼルの効果を使い、RRーコールを止める！」

ワイゼルの手から再び光が放たれ、RRーコールを破壊する。

だがその瞬間、黒咲の口元が笑った。

「俺を揺さぶりにきたつもりだったろうが……賭けに負けたのは貴様の方だったな……！　今ならば動ける！　俺はレベル4のモンスター3体でオーバーレイ！　雌伏のハヤブサよ。逆境の中で研ぎ澄まされし爪を挙げ、反逆の翼翻せ！　エクシーズ召喚！　現れる！　ランク4！　RRーライズ・ファルコン！」

ランク4／闇属性／鳥獣族／攻 1000／守2000

鳥獣族レベル4モンスター×3

(1)：このカードは特殊召喚された相手モンスター全てに1回ずつ攻撃できる。

(2)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除き、

相手フィールドの特殊召喚されたモンスター1体を対象として発動できる。

このカードの攻撃力は、対象のモンスターの攻撃力分アップする。

黒咲の上空に、青い隼が舞い降りる。

「攻撃力1000だが……その効果という事はこちらにくるか！」

「そうだ！ 俺はライズファルコンの効果を発動！ オーバーレイユニットのファジー・レイニアスを取り除き、デッキから手札にファジー・レイニアスを加えると同時に、貴様のブラッド・メフィストの2800を加え、ライズファルコンは2900！ さあ、バトルだ！ まずはブラッド・メフィストを攻撃！ 喰らえエエツ！ ブレイブ・クロール！ レボリユーション！」

ライズファルコンがブラッド・メフィストに炎の体当たりを食らわせる。

「ぐあああつー！」

ブラッド・メフィストは爆散し、跡形も残らず消えた。

セルゲイ LP5000↓4900

「さらにもう一発だ！ もう一発食らえ！」

ワイゼルに向かってさらにライズファルコンは空中で旋回し、機皇帝ワイゼルへ突進すると腹部を貫いて破壊する。

「ぐうううー！」

セルゲイ4900 ↓ 4500

「貴様の体力はいくら4500とあれど、フィールドも、手札も0。この状況ではサレンダーするしかあるまい。……負けを認めるのだな」

黒咲が勝ち誇った顔で、こちらを論してくる。……ああ。

してしまったか。

ー俺はその顔が見たかったのだ。  
セルゲイの口元に、笑みが浮かんだ。

セルゲイLP4900 黒咲 LP1600

黒咲 隼 手札2 場 R Rーバニシング・レイニアス バック

R Rーネスト

セルゲイ 手札0 場 0 バック 0

## 第二章 地下と道化師と―3

「さあ、ボクのターンだね！ ドロー！」

デニスが、大げさにドローをする。

その直後に部屋が暗くなり、一筋のスポットライトがデニスを照らした。

「さあこれからミスターロジエのお望みのペンデュラム召喚を見せたいと思いますが……あつ！ ……うーん、この手札、ちよつと事故つてますねえ……という事で、題目変更！ 別の隠し手を見せましょう！」

デニスは少し険しい顔をした後に、ふと先ほどまでの様子に戻り、手札を構える。

「ボクのフィールド上のモンスターがいない場合ジェスターコンフィを特殊召喚！」

「ヒーツヒツヒ……」

奇妙な声を上げつつ、ピエロが地面に降り立つ。

「さらに、マジックカード！ ワン・フォー・ワン！ ボクは手札のH・Cサウザンド・ブレードを捨ててデッキからレベル1モンスターの、マジック・リサイクラーを特殊召喚！」

「そして、2体以上モンスターが場に居るとき、手札からレベル4モンスター、emハットトリツカーを特殊召喚！ さらに、emトリツク・クラウンを通常召喚！ このまま行きますよお、プレジデント！

show must go on！ 天空の奇術師よ 華やかに舞台を駆け巡れ！ エクシーズ召喚！ 現れろ！ ランク4！ 《Emトラピーズ・マジシャン》！」

ランク4／光属性／魔法使い族／攻2500／守2000

魔法使い族レベル4モンスター×2

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

自分はこのカードの攻撃力以下の戦闘・効果ダメージを受けない。

(2)：自分・相手のメインフェイズ1に1度、このカードのX素材を1つ取り除き、

このカード以外のフィールドの表側攻撃表示モンスター1体を対象として発動できる。

このターンそのモンスターは2回攻撃でき、バトルフェイズ終了時に破壊される。

(3)：このカードが戦闘または相手の効果で破壊され墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「Em」モンスター1体を特殊召喚する。

さらなるピエロが、次々と飛び出してくる。なるほど、まるでこれではサーカスだ。

「エクシーズ召喚を決めてきたか……」

私は唸る。なるほど、単純に同じレベルを揃えるだけと考えていたのだが、モンスターによっては素材縛りがあるということらしいな。……地獄の暴走召喚が使えると思っていたが、そういう訳にはいかないうだ。

デニスはこちらを盛り上げようと、尚も声を張る。

「まだまだ、こんなもんじゃ無いことを見せましょう！ さらに、レベル1のマジック・リサイクラーとジェスターコンフィをオーバレイ！ 守備表示で現れる！ シャイニート・マジシャン！」

ランク1／光属性／魔法使い族／攻 200／守2100  
レベル1モンスター×2

このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

また、このカードを対象とする魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、

このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

「ほう……1ターンに二度もエクシーズ召喚を……素晴らしい」  
鮮やかな展開に、思わず拍手する。するとデニスは気を良くしたようだ。

「ありがとうございます、ミスターロジエ」

素直な様子で、敬意を示してくる。

……芸に関しては、素直なようだ。だが、しかしながら、このデニスのデッキは恐ろしい。シャイニートという青髪の女で相手の除去を封じつつ、トラピースマジシャンを使い誰かを2回攻撃させて制圧させるという殺意に溢れたデッキのようだ。

今回ペンデュラムが不発であったからよかつたものの、ヘタをしたら4000オーバーのダメージを受けて1ターンキルをされていたな。

「さあ、バトルといきますよ！ いいですか!？」

バトル宣言が入る。　　ーシャイニートがあらゆる魔法を打ち消さないだけマジだが、長期戦は不利のようだな。

追い込まれる前に、あらかじめアクションカードを目で探す必要もありそうだ……。

「Emトラピース・マジシャンで、忍者マスター HANZOを攻撃！」

杖を構えたトラピースマジシャンに迫る。ええい、アクションカードを手取る時間は無いが……させるものか。

「罨発動！ 忍法 変化の術！」

私が宣言すると同時に、罨が立ち上がる。

「WAO！ 忍者は何に化けるのかな？ やっぱりカエルのかな？」

「……違いますよ。私はHANZOをリリースし……デッキの宝玉獣 サファイア・ペガサスを守備表示で特殊召喚！ 同時にデッキからさらに同名の宝玉獣 サファイア・ペガサスを魔法ゾーンにセットする！」

私の忍者は馬に化け、そして同名の馬をセットするー。このやり方が、一体何なのかはまだ、分かるまい。

「ー宝玉獣？ 変化の術でそんなのを呼び出す人、ボク初めて見た」  
「フフ……私も面白いデッキを作るのが、好きなんですよ」

私はそう言い返す。アカデミアであったデッキコンテスト……遠い昔、学生時代に教師にはそこそこ評価された覚えがあります。

「でも、せつかく呼び出したペガサスだけど、戦闘破壊させてもらいま

すね！」

「構いませんよ。ダメージは入りませんからね」

その言葉の直後、こちらのサファイア・ペガサスがトラピース・マジシャンに破壊されて魔法ゾーンに置かれる。

少しだけ、デニスの顔が真顔になった。

大方、一体何を考えているー？ だと思えますけどね。

「ーではボクは一枚、永続魔法のバリア・バブルを貼ってターンエンドですよ。それでは、ミスターのお点前を拝見しましょうか」

デニスはふふつと、笑う。

さて、私もそろそろ反撃しなければ。

ロジェLP4000 デニスLP4000

ロジェ 手札3 場 0 バック サファイアペガサス×2 伏  
せ1

デニス 手札0 場 e mトラピースマジシャン シャイニート  
マジシャン バック バリア・バブル

## 第二章 地下と道化師と―4

「私のターン！ ドロー！」

私は新たにデッキから手札を加える。ーー来た。

「エクシーズ召喚、見事なものでした。ーー私も、感動いたしましたよ。お礼と言ってはなんですが、疑似ペンデュラム、そういったものを私も考えてみたのでこの出来を見ていただけませんか？」

私はそういいつつ、一枚のカードを開示する。

「私は《ヘカテリス》を墓地に送り、《神の居城―ヴァルハラ》をデッキから手札に加える」

「天使族のサポートカード？ ミスターのデッキはグッドスタッフなのですか？」

デニスが、首をかしげてくる。まあ、無理もあるまいー疑問は当然、それはそうだろう。私自身、同じような構築の人間はほぼ見たことがない。

「私のデッキは、グッドスタッフなどという気心のしれたものではありませんーー永続魔法、ヴァルハラを発動！」

私の傍にカードが立ち上がる。

「これで私は、フィールドにモンスターが居ない時に天使族モンスターを特殊召喚できますーー。それでは、行きますよ」

「ーーなんだか、ワクワクしてきましたね！ 見せてくださいよ！」

「言われずとも、披露しましょう！ この私の力を！ ヴァルハラの効果を使い、《宝玉獣 ルビー・カーバンクル》を守備表示で特殊召喚！」

星3／光属性／天使族／攻 300／守 300

このカードが特殊召喚に成功した時、自分の魔法&罫カードゾーン上から

「宝玉獣」と名のついたカードを可能な限り特殊召喚できる。

このカードがモンスターカードゾーン上で破壊された場合、墓地へ送らずに永続魔法カード扱いとして

自分の魔法&罫カードゾーンに表側表示で置く事ができる。

「What!?! ヴアルハラにそんな使い方があったなんて!」

素で驚く、デニス。まだまだ、私が見せる技はこんな浅くはないですよ。

「ルビーの効果発動! 私の魔法ゾーンにある二体のペガサスをフィールドに特殊召喚し、それぞれの効果でさらにデッキから新たなペガサスと、トパーズタイガーをセットする!」

「オーフィールドに、あつという間に3体ものモンスターを……此処から、どうするの気になります」

「なあと、普通にするだけです。通常召喚! チューナーモンスター、《極星天ヴァルキュリア》!」

「チューナーモンスターをこのタイミングで……ということとは」

「そう、私の使う……シンクロ召喚です。……私はフィールドの二体のペガサスに、ヴァルキュリアをチューニング!」

4+4+2

「北辰の空にありて、全知全能を司る皇よ! 今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ!!シンクロ召喚! 天地神明を統べよ、最高神、《極神聖帝オーディン》!」。

星10/光属性/天使族/攻4000/守3500

「極星天」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動することができる。

このカードはエンドフェイズ時まで魔法・罫カードの効果を受けない。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する

「極星天」と名のついたチューナー1体をゲームから除外する事で、

このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる。

まさに神と言うべき神々しきモンスターが、降臨する。シンクロ次元を治めるだけには、十分すぎる力を持つモンスターだ。

「amazing……」

「だがまだ終わらせない！ 私はさらに、伏せていた罠カードのエンジェル・リフトを使用する！ 墓地から蘇れ！ 《極星天ヴァルキュリア》！」

罠の効果で墓地から天使が再びフィールドに降り立つ。此処からがさらにデツキの本領発揮だ。

「……さて、デニス君。一つお教えしましょう。自分のフィールドの魔法ゾーンに2体以上宝玉獣のモンスターがいる時、使える魔法カードがあります」

「……あく……ボク、実は宝玉には詳しくなくて。効果はどんなんです？」

「デツキから、宝玉獣を特殊召喚するという効果ですよ。……そして、先ほどもみたように、私のデツキにはまだルビー・カーバンクルがいるのです」

「ーげっ！」

「私は手札から、《宝玉の導き》を使いましょう。この効果でさらにデツキから、新たな《宝玉獣ルビー・カーバンクル》をフィールドに呼び、その効果で永続魔法扱いのサファイア・ペガサスとトパーズ・タイガーを特殊召喚します。ー同時に墓地から、一体のサファイア・ペガサスをさらに永続魔法扱いとして、セッティング」

「そして私はさらに、フィールドのレベル4、《サファイア・ペガサス》とレベル4、《トパーズ・タイガー》にレベル2 《極星天ヴァルキュリア》をチューニング！」

4+4+2

「北辰の空にありて、全知全能を司る皇よ！ 今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ!!シンクロ召喚！ 天地神明を統べよ、最高神、《極神聖帝オーティン》！」。

神の横に、さらに神が出現する。この狭い会議室には、不釣合いなくらいだ。

「攻撃力4000が二体目エ!?　ち、ちよつと冗談きついかな……」  
半ば啞然とするデニス。

「ーもしも私がエクシード召喚を使えたのならば、此処で2体のレベル3であるルビーを使って何かができたのでしようがね。……生憎今の私に出来るのは此処までなのですよ」

……実に、惜しい事です。

私はそう言い放ち、バトルフェイズに入る。

「バトル開始。一体目の極神聖帝オーディンで、emトラピース・マジシャンを攻撃!　ヘヴンズ・ジャツジメント!」

「ーアクションマジック!　《ハイダイブ》!　これでトラピースマジシャンの攻撃力は、1000上昇し、3500になる!」

デニスは咄嗟に攻撃に対応してカードを使用する。気転でダメージを、減らしたか。

「しかし切れ味は存分に受けて頂きます!」

オーディンに殴り飛ばされ、トラピース・マジシャンは吹き飛ばす。

デニス　LP　4000↓3500

「ううっ……!　でも、バリア・バブルのお蔭で1ターンに1度は、ボクのemは破壊されないよ!」

「ならばもう一度叩き込むまでです。二体目の極神聖帝オーディンで、トラピース・マジシャンをもう一度攻撃!」

「まだまだ!　アクションマジック、奇跡!　ダメージを半分にし、トラピースの破壊を食い止める!」

トラピース・マジシャンにさらにオーディンの追撃が加わる。だが今度は、奇跡のエフェクトがトラピースマジシャンを包み守護してくれた。

デニスLP3500↓3250

「ーこの攻撃に耐えるとは、中々やりますね。正直耐えるとは予想外でしたよ」

予想外のしぶとさに、私は舌を巻く。

「お褒めの言葉、ありがとうございます。流石神と名のつくモンス  
ターを従えるだけの事はありますよ」

「一人を褒めるのが上手いですね、デニス君。正直君は私の部下に  
欲しいくらいですよ。……さて、私はここまで動いてはもう何もでき  
ないのでこれでターンエンドです」

デイスクをエンドさせる。

デニス・マツクフィールド……流石ランサーズの一員というだけは  
ある。あの赤馬零児よりは劣ると言っても、相当の使い手だ。この盤  
面でも、けして油断はできないだろう。

ロジエLP4000 デニスLP3250

ロジエ 手札1 場 宝玉獣ルビー・カーバンクル×2 極神聖帝  
オーディン×2 バック サファイアペガサス×1 神の居城  
ヴアルハラ

デニス 手札0 場 emトラピースマジシャン シャイニート  
マジシャン バック バリア・バブル

番外ー デュエリストクラッシュャーVS天翔ける隼ー3

セルゲイLP4900 黒咲 LP1600

黒咲 隼 手札2 場 R Rーバニシング・レイニアス（攻撃力2900）ユニット2 バック R Rーネスト

セルゲイ 手札0 場 0 バック 0

「楽しくなってきたな！ 俺のターン！ ドロー！」

手札を加えたセルゲイは自身の手札を見て、歓喜の表情を浮かべて加速する。

「ああ……気分がいい！ 気分がいい！ これでは蹂躪できてしまうではないか！」

「……ッ」

はち切れんばかりに笑顔のセルゲイを見て困惑する黒咲。

「……何を引いた、と言いたそうな顔をしているな。俺は墓地のり・バイブルの効果を発動する！ 貴様のエクストラは潤沢だが、俺のエクストラは後3枚！ よって効果発動だ！ ライフを2000支払い、レベル1チューナーモンスターのり・バイブルを墓地から特殊召喚！ フフハハハハ！」

セルゲイLP4900↓2900

セルゲイの叫びと同時に、本が場に出現する。

「……まだ、やる気か」

「そして俺は、ライフを1500支払い、魔法カード《自律行動ユニット》を発動！ 貴様の墓地のバニシング・レイニアスを奪わせてもらう！」

セルゲイLP2900↓1400

「ー俺の墓地のモンスターをだど！」

黒咲の驚いている間に、自律行動ユニットは墓地へ潜り込んで、眠っているバニシングレイニアスを引きずり出す。

「フツハハハ！ 装着！ 貴様のバニシング・レイニアスは頂いた！」  
「貴様……！」

黒咲の顔が険しくなる。

「なあに、すぐに返してやるさ。俺はレベル4、RRーバニシング・レイニアスにレベル1、リ・バイブルをチューニング！」

「水晶機巧ーアメトリクス！」

星5／水属性／機械族／攻2500／守1500

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：このカードがS召喚に成功した場合に発動できる。

相手フィールドの特殊召喚された表側表示モンスターを全て守備表示にする。

(2)：S召喚したこのカードが戦闘・効果で破壊された場合、

Sモンスター以外の自分の墓地の「クリストロン」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

全く見た事のないシンクロモンスターの出現。それは黒咲を怯ませるには十分だった。

「ーライズ・ファルコンが守備表示にー!?」

「さらに墓地のゼータの効果でイーバトークンを守備表示！ 貴様は攻撃力に自信があるらしいが、これではな！ 消えろ！ バトルだ！」

アメトリクスの攻撃がライズファルコンの頭を切り落とし、爆散させる。

「俺はこれで、ターンエンドだ」

「ー手札1からシンクロモンスターまで繋げてくるとは……化け物め」

黒咲の手札は2枚。とはいえ片方はファジー・レイニアスだ。次の手札次第でRRーブレード・バーナー・ファルコンを作るか、フォース・ストリクスを作るか。ーいずれにしろ、時間稼ぎにしかならない。

「さあ、引け！ そして絶望の表情を浮かべるがいい！」

セルゲイが罵ってくる。

「――絶望する、だと？ 俺はどんな状況でも長い痛みに耐えてきた。瑠璃を失った悲しみという感情にな。――その俺の前に貴様という存在が現れたところで、全く怖くもない！ それに、この痛みこそ――俺を本気にさせるに相応しい！」

「ドロー！」

二本の指で、デッキから新たなるカードが引き抜かれる。

モンスター《RRーミミクリー・レイニアス》、よし、いけるぞ！

「通常召喚！ RRーミミクリー・レイニアス！ さらに、フィールドにRRがいるとき、手札から《RRファジー・レイニアス》を特殊召喚する！」

「またエクシーズか！」

「ああ！ エクシーズは俺の力！ 貴様などに敗れはせん！ 俺は発動済みの永続魔法《RRーネスト》の効果で、《RRーペイン・レイニアス》を手札に加える！」

「《RRーミミクリー・レイニアス》の効果発動！ フィールドのRRのレベルを1ずつ上げる！」

「レベル操作だと？ そんな事をして、何になる！」

「さらに俺は、フィールドのファジー・レイニアスを参照し、手札の《RRーペイン・レイニアス》の効果を使う！」

星1／闇属性／鳥獣族／攻 100／守 100

「RRーペイン・レイニアス」の効果は1ターンに1度しか使用できず、

このカードをX召喚の素材とする場合、鳥獣族モンスターのX召喚にしか使用できない。

(1)：このカードが手札に存在する場合、

自分フィールドの「RR」モンスター1体を対象として発動できる。

自分はそのモンスターの攻撃力か守備力の内、

低い方の数値分のダメージを受け、このカードを手札から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードのレベルは、対象のモンスター

のレベルと同じになる。

「俺はファジー・レイニアスの攻撃である500のダメージを受け、レベル5として特殊召喚する！」

「さらに俺のエクストラには、レベル5同士で出せるモンスターがいる！俺は3体のモンスターでオーバーレイ！ 獰猛なるハヤブサよ。激戦を切り抜けしその翼翻し 寄せ来る敵を打ち破れ！ エクシーズ召喚！ 現れろ！ランク5！《RRーブレイズ・ファルコン》！」

赤き隼が現れ、セルゲイを目に捉える。

ランク5／闇属性／鳥獣族／攻1000／守2000

鳥獣族レベル5モンスター×3

(1)：X素材を持つているこのカードは直接攻撃できる。

(2)：このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、

相手フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを破壊する。

(3)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊し、破壊したモンスターの数×500ダメージを相手に与える。

「そんな豆鉄砲で俺を沈めるつもりか？ やってみるがいい！」

「沈めるつもりか、だと？ 沈めるつもりではなく、沈めるのだ！俺は装備魔法、ラプターズ・アルティメット・メイスを発動！ こいつをブレイズ・ファルコンに装備！」

#### 装備魔法

「RR」モンスターにのみ装備可能。

(1)：装備モンスターの攻撃力は1000アップする。

(2)：装備モンスターが、装備モンスターより攻撃力が高い

モンスターの攻撃対象に選択された時に発動できる。

デッキから「RUM」魔法カード1枚を手札に加え、

その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

「ぐぬっ……!」

「体力を削りすぎたのが仇となったな。バトルだ! ブレイズファルコンは相手プレイヤーに、ダイレクトアタックする事ができる!

行け! ブレイズファルコン! 赤熱の怒りを滾らし、反逆の槍を突き立てろ! 迅雷のラプターズブレイク!」

アメトリクスの横をすり抜け、セルゲイに向かい稲妻を放つブレイズファルコン。

セルゲイLP1400↓0

「ぬうううっ!」

その衝撃でDホイールが横転し、セルゲイは道路に投げ出された。

「……あの速度では!」

WINNER! 黒咲!

会場のコールが響き、観客が湧く。

だが黒咲は慌ててDホイールを減速して強引に止め、セルゲイに駆け寄ろうとした。

この次元の人間はあまりにも、他人に無関心すぎる……そう思っている事でもあるし、自分がこの決闘者を殺したのだとしたら、後味が悪い。

しかし地面に投げ出されてバウンドしたはずのセルゲイは、何事もなかったように自力で起き上がった。

「フッフ……こんな、面白い決闘者が残っていたとは……地下も捨てたものではないか」

「……痛み一つ、ないのか!」

メットを外した黒咲は、目の前のセルゲイに絶句する。

……先ほどのデュエル終盤でも、時速100キロは出ていた。それだというのは、奴は骨折どころか脳震盪一つ起こした様子がない。

「大丈夫なのか」

そう尋ねるが、セルゲイはこちらの質問に答えずに自分の身体についていた埃を払うと、

「名前は覚えておこう。黒咲 隼。今回は借り物のデッキで挑ませて

貰ったがー次は本気で行こう。それまで、連勝記録を破られるなよ。次は晴れの舞台上で美しく潰してやる。フレンドシップカップで、待っている」

黒咲を一瞥して、普通に自分の足で退場ゲートから出て行った。

「ーフレンドシップ、カップか……あのような化け物が、幾らもいるというのか……？」

先ほどの戦い、奴はアメトリクスのシンクロ時に出たイーバトークンを何故か攻撃に使わなかった。やつがあれをリリースし墓地からゼータレティキュラントを呼び出せば、俺を仕留めることが出来たというのに。

戦略でも、身体能力でも負けているー。

奴は全然、本気ではなかった。世界は広い。俺も鍛えれば、あれほどの頑強な身体にもなれるのかもしれない。

黒咲は両手を握りしめ、横転したDホイールに目を向けていたー。

## 第二章 地下と道化師とー5

ロジエLP4000 デニスLP3250

ロジエ 手札1 場 宝玉獣ルビー・カーバンクル×2 極神聖帝  
オーデイン×2 バック サファイアペガサス×1 神の居城ー  
ヴァルハラ

デニス 手札0 場 emトラピースマジシャン シャイニート  
マジシャン バック バリア・バブル

「ボクのターン、ドローするよー!」

デッキから手札を補充した方がいいが、攻めあぐねるデニス。

「カードを一枚伏せて、トラピースマジシャンを守備表示に。ターン  
エンドだよ」

自分でも冷や汗をかいているのがわかる。ーライフでは殆ど動いていないが、アクションマジックを使うのではなく、ロジエに使わされている。自由意思で使っているのではなく、使わねば倒される状況。これは不利だ。なにより4000をいきなり越えるモンスターが、こちらに出せない問題がある。

今引いた《砂塵のバリアードラストフォース》は攻撃宣言時のモンスターを裏守備にする永続的な効果があるので決まりこそすればこの状況を凌げるが、そもそもオーデインはトラップを無効化させる能力を持っているので現実性があるとは言えない。

「おや、息切れですか。無理もない、大量展開しましたからね」

ロジエがデッキに手を掛ける。

「私のターンです! ドロー!」

ロジエLP4000 デニスLP3250

ロジエ 手札2 場 宝玉獣ルビー・カーバンクル×2 極神聖帝  
オーデイン×2 バック サファイアペガサス×1 神の居城ー  
ヴァルハラ

デニス 手札0 場 emトラピースマジシャン シャイニート

マジシャン バック バリア・バブル 伏せー(ダストフォース)  
「私は今引いた《ギャラクシー・サイクロン》でセットカードを割らせてもらいましょう」

ロジエの言葉と共に、せつかく伏せたダストフォースが爆散する。  
「まずいっー」

「おやおや、危ないところでした。うっかり攻撃したら止められるとこでしたね」

……ギャラクシー・サイクロンが墓地に行った今、次のターンでバリア・バブルも割られてしまう。万事休すか。

「さらに私は、《極星天ヴァルキュリア》を通常召喚！」

「まだチューナーが!？」

「2体の《ルビー・カーバンクル》にレベル2、《極星天ヴァルキュリア》をチューニング！」

「古えの機械龍、此処に蘇れ! スクラップ・ドラゴン!」

「ー!」

デニスは似たフォルムを持つモンスターをかつて見た覚えがある。古代の機械巨竜。

「バトルフェイズ! オーディン二体で、《シャイニート・マジシャン》を攻撃!」

「アクションマジックがー見つからない!？」

「ヘヴンズ・ジャッジメント!」

「あぁっ!」

オーディンの雷撃がシャイニート・マジシャンを襲う。

シャイニートマジシャンの戦闘破壊耐性は1ターンに一度のみ。これでは、勝てない。

盤面こそ残せたが頼みのトラピーズマジシャンが一体……これでは。

「ー次のターンが最後です」

そう宣言するロジエからは、全身から有り溢れた自信が満ちていた。

## 第二章 地下と道化師と―6

「私のターン！」

そう宣言してカードをドロ―した瞬間、今度は私のディスクが点滅する。

「―セルゲイ？ 着信だど？」

デュエル中に、全くもって面白くもない。

「デュエル中だ！ 貴様は走っていた訳ではないのか!？」

「―終わった。帰るぞ。置いていく」

ディスクから、奴のテンションの低い声が聞こえる。

「待て！ 5分待て！」

そう返事をするが、電話は勝手に切られる。

「―ッ 馬鹿者め！」

王の右腕になるべき者があんな好き勝手にしおって。

―つと、危ない。デニスにばれるところだった。

「―ミスター？」

「おっと、お見苦しいところを失礼しました。しょうがない。メイン

フェイズ！ ギャラクシー・サイクロンでバリア・バブルを破壊！」

態度を繕いつつ、攻めの盤面を作る。

「さらに《スクラップ・ドラゴン》の効果でemトラピーズ・マジシヤ

ンとヴァルハラを破壊！」

スクラップ・ドラゴンが口からブレスを吐き、トラピーズ・マジシヤ

ンを消しとばす。

「―ぐううっ！ emトリック・クラウンの効果発動！ 100

0ダメージを受け、このカードを特殊召喚する！ さらに墓地のサウ

ザンドブレードの効果発動！ ダメージを受けた時、このカードも攻

撃表示で特殊召喚できる！」

デニスLP3250↓2250

すぐさまリカバリーに入ってくるデニス。だが、既に遅い。

「《スクラップ・ドラゴン》で《emトリック・クラウン》を攻撃！」

「守備表示のトリッククラウンは破壊されても痛くないね」

「ならばオーデイン！ サウザンドブレードを消し去れ！」  
神の攻撃が、H・Cサウザンドブレードに直撃する。

「ーOH！ NOOOOOOOO！」  
デニスLP2250↓0

衝撃で吹き飛ぶデニスは、足を引つ掛けて近くの椅子をひっくり返す。

デニスが吹っ飛ぶその様子を見て、私は密かに心の中に歓喜を感じた。

ー勝った。融合なしでー勝った！

こんなに自力でデュエルをして達成感を得たのは何年振りだろう。アカデミアでは全く得られなかった歓び。そしてシンクロ次元でも僅かしか得られなかった魂の叫び。

「よつと……いやあー、お強いですねえ ミスター。ペンデュラム召喚を見せられず、申し訳ない。もしも明日良ければ、本物のペンデュラム召喚を黒咲相手にお見せしますけど」

デニスともぞもぞと、起き上がってくる。

「いえいえ、エクシーズを見せて頂けただけでも嬉しかったです。お見事でしたよ」

私は拍手する。

ー先ほどの戦闘中、私のディスクには相手のディスク内を読み取る装置を装備させていた。ーだからあのデュエルの中で、デニスのディスク内のデータは読み取れたはずだ。

故にデニスが過去使ったカード、そしてスタンダードやエクシーズ次元や融合次元で目にしたカードをもこれからデータを元に錬成することが出来る。

フフ、そう思えば我ながらいい仕事が出来た。まだシンクロ次元内にはないカードの情報、そして融合次元内で私が居なくなつたあとに追加されたカードについても、これでいくらかは知ることが出来るだろう。そして、エクシーズとペンデュラムについてもだ。

あとは気取られずに撤退をするだけだがー。

「ー先ほど電話が掛かってきてしまったように、どうやら会議の予

定が入ってしまったようなのでーとりあえず、小切手をお渡ししておきましょう」

Jean-Michel Rogerとサインした略式の小切手を渡す。本物のトップスは一々金にケチケチしないもの。これだけの対価を渡す価値があることをしてくれて有難いものだ。

「ありがとうございます、これで仲間を探すまで飢え死にしないで済みそうですよ」

デニスはその小切手を、礼を言いながら受け取る。ー君からは、もつと大切な情報を頂いたから別に構わないのだがね。

「いえいえ、また困った事があれば治安維持局へとお越しください。その時は、手厚く歓迎しますよ」

右手を差し出し、握手を求め。

今度はデニスはその手を、恭しく握ってくれた。

ー全ては、計画通り。

私の真の王、そして王をも超える道は、やっと始まったのだ。

いい気分で、私はこの日を終えられるー。

ロジエがいなくなった後、デニスはデツキの一番上をそつとめくつた。

「ー《ブラック・ホール》……ね。マストではないけど、中々惜しかった。んー、あとーターン早くお前がくれば反撃できたんだけどなあ。ま、しょうがないか。負けるのもサービスだしね！ さて、このお金で権ちゃんにごちそうしてあげよつと！」

鼻歌交じりに、デニスは、権現坂との合流へ急いだ。

ー明日は黒咲ともデュエルしたいし、色々やりたい事もあ  
るー。

## 幕間――移動中

「――ロジエ」

「――なんだ、セルゲイ」

私は帰りの車の中、助手席から後ろのシートを塞いでいるセルゲイに向かって応答する。

奴の凶体はでかいので、ルームミラーを使っても後ろが見えない。

「珍しく機嫌が良く見えるぞ」

「――そう、見えるか？ 私からすればお前から私に話し掛けてくる事のが余程珍しいと思うが。地下でいいデュエリストでも、見付けたか？」

「まあな」

セルゲイはそう頷く。

こいつはデュエルマシン。それだけに、私が治安維持局長官であるにも関わらず、物怖じせず普通に話し掛けてくる。

――多少気に入らないかといえそうですが、むしろそれはそれでよく、私が私として無理に敬語など使わず本音で喋られる相手だ。

ホワイト・タキのような行政評議会の老いぼれどもとやりあうような態度で普段からいては、こちらが疲弊する。

「成程、それではお前にとっても収穫はあったという事か」

「――そうだな」

「ならば良い。フレンドシップカップへの仕込みもしなければならぬ。あの黒咲隼、デニス、それに権現坂と言ったか。彼らを早急にこちらに引き込む事によって、セレナと柊柚子を手にし、ランサーズを瓦解させる――そして、我々もデニスのディスクを解析して得られたデータから、数々のカードを量産する必要がある」

「――カードの量産？」

セルゲイの片目が、光った。

「ああ。そもそも私の使う《簡易融合》。これはそもそも融合次元にしか存在しないカードだ。それと同時に、こちらの世界にあるチュー

ナーモンスターは、シンクロ次元固有のカード。つまり、セキユリテイの使う《ゴヨウ・チエイサー》などはこちらの世界にしかない」「ーでは、何をするといいのだ」

「決まっている、融合、シンクロ、エクシーズ。あらゆる戦い方を選べるよう、セキユリテイのデッキや我々のカードのプールのプールを広げるのだ」

「ーそのような事をする必要は」

「では考えてみる。お前の戦った黒咲隼。あれがシンクロ召喚を使えるようになったと仮定してーどう思う？」

セルゲイは少し考えたような顔になってー。

「……美しい！」

満面の笑みでただそう、言った。

「そうだろう。だとすれば我々もさらに美しくなれるというもの。貴様にとつては悲願であったジャック・アトラスですら軽く屠れるようになれるぞ」

「ー面白いぞ、それは。少なくとも退屈ではない」

「ーそう分かったら、私に協力しろ。分かったな、セルゲイ」

「ー俺はどうすればいい？」

「取り敢えずは、だ。明日ランサーズの半分と面会する。それまでは科学者どもの使うディアブロ相手にデュエルをしている」

「ーディアブロ？」

「オベリスクフォース相手にぶつけるデュエルマシンだ。時間がくれば呼ぶから、後はお前の好きにすればいい」

「ーデュエルマシンだと？ そんな物なくとも、俺で充分ではないか？ それとも俺の実力に疑問でも？」

珍しく、疑念を持つセルゲイ。だが、そこへ

「ーお前には役目がある。アカデミアでのエリート、ユーリという男を討ち取る役目が。ディアブロは、デュエルチエイサーと連携し雑魚掃除を行う為のシステムだ。私がアカデミアを離反し、叩き潰すと

誓ったからにはお前には是非ユーリを潰してもらわねばならない」

「――捕食植物と言ったか。特性すら解明出来ていないが、圧倒的な強さだった。」

あれを消し去るには、セルゲイしかない。奴のデュエルパワーならば、潰せる。

「なるほど。ならば分かった。お前に協力して、明日はそのマシンとやらの調整を手伝おう……美しさの為ならば、耐えてやる」

セルゲイは鼻息荒く、後ろの座席にどっかりと体重を落とす。

### 第三章 シティの新たな夜明け

「ーさて、今日は地下の大会の邪魔はせず、普通にやるとしましょう……DC達への命令は、まずはセレナ達の確保だけをやっておくように最優先。そして今回は馬鹿な看守にやらせず、直接私の元へと連れてくるようにしなくては。ー計画のミスを全てへし折る事で、より良い未来を選ぶ必要がある」

長官室に腰掛け、立体ディスプレイに小さく映るセルゲイを片目に、本日の予定を整理する。

本来ならば今日まずセレナ達の確保が成功し、徳松とランサーズの接触がある。そして明日には刑務所内で水泳大会……いや、デュエル大会が行われるはずだ。

時間の猶予はあるはずではあるが……予定を切り詰めて考えねば、悪い事も起こりかねん。

脱走を即座にされるようでは職務怠慢としか言いようがないし、捕縛隊も近いうちに強化せねばなるまい。エクシーズの対策が全く出来てない時点で、そもそも駄目だ。

……しかし本当に我ながら今までのシティの体制はザル過ぎだ。チエスで遊んでいる場合ではない。突然来た異邦人にあっさり脱出されるのは、いくらなんでも馬鹿極まりない。

ええい……まずはこのシティの防御面を上げて守らねば、私自身の王への道が断たれてしまう……だとすれば、このままシティを要塞化して、名実ともに支配者になるしかあるまい……。

まずはこの保身の為にシティの存続を得る対策を考えよう。……コモンズに自衛の為にデュエル教育をさせるか？ いや、過度な教育をコモンズにさせる事は反乱に繋がりがかねん。これはダメだな。

そうなると別案として、徳松をこちらのデュエルチェイサーの教育係として招き、利用するという手もあるかー。いやいや、奴には奴の場所がある。徳松が監獄の模範的主としているからこそ今の監獄の治安が成り立っているとも言える。徳松を外したら恐らくは脱走を企てる愚か者も増えるだろう。

「……はて、それならばいつそ……囚人を対アカデミアに売てるか？囚人からメンバーを選抜し、独自にシンクロ次元としてのランサーズを作るか。勝てばトップス入りという餌をチラつかせるなどすれば、まあ……いけるだろう。」

「……私の知るアカデミアは恐らくコモンスが一人突っ込んだくらいで倒せるほど軽くはない。」

だが、囚人により消耗させたところで、デュエルチェイサーに突っ込まれば少なくともこちらの損害は減るはず。もしも囚人が敵を討ち取れば、儲け物として考えられる。

だが何処から調達する……？　「……そうか、地下労働との選択制にすればいいのだ。」

囚人の中でも飛び切り罪が重い者。それらに地下で労働を選ぶか、異次元との侵略者と戦う尖兵となり、私の部下になるかを選ばせる。それならばなんら問題はない。

そして、フレンドシップカップはその大会での篩として不足もなし。

やれるではないか。

片手でポーンをくるくるしつつ、そう結論付ける。

そうと決まれば……。

「……長官！」

その時、言葉と共に人が駆け込んでくる。白衣の部下だ。……セルゲイの調整を時間が戻る前の世界でもやらせていた者。

「何ですか、騒がしい。ノックくらいしたらどうです？」

「ディアブロが、脱走しました！」

「……何イ!?!」

慌ててセルゲイの居た部屋を見ると、共に調整していたディアブロが居ない。折角新たな武器の一つになり得ると思ったものが、何故。

『……セルゲイ!』

「……既に追撃に入っている。ディアブロはデュエルチェイサーのホ

イールを奪い、逃走している」

セルゲイのメットに通信を送ると、そうセルゲイが返してくる。どうやら、外か。通信にエンジン音が混ざるので、既にDホイールに乗っていると見える。

『何故私に連絡を取らなかった!』

「貴様は自分の都合の良い時しか連絡しないだろう」

「ーッツ」

拳に力が入る、耳に痛い言葉だ。

『セルゲイ、奴を壊すなよ!』

「……保障は出来んな。それに、むしろ俺が本気でやっても壊れないぐらいでなければアカデミアには勝てないのではないのか?」

「ーっ、いいだろう、やってみるがいい! 貴様に任せるぞ、セルゲイ!」

戦闘メカデュエリスト……ディアブロは私のポケットにいつの間にかあったフラッシュメモリのデータにあったもの。それを再現したものだ。

AIデータは本部PCに蓄積しているが、今のセルゲイのデータはディアブロと何回か対戦した事により認識されているはず。

セルゲイが勝てる確率は低いが……どうやるものか、見ものだが……。

いや、予定を崩されてはまずい。私はそろそろ、黒咲やデニス達へと接触せねば。

ええい、私はなんて運が悪いのだ……!

……負けてくれるなよ、セルゲイ。

### 第三章 シテイの新たなる夜明け―2

密かにあがってくる心の中への不安を押し殺して、通信機のスイッチを入れたまま地下デュエル場に赴く。

そこではデュエルが丁度終わり、黒咲が勝利したところであった。――渋滞のせいで見損ねたか。まあいい、後で録画資料をギャラガーに提出させよう。

賞金が黒咲の手に渡り、嬉しそうに右手を掲げているのが見える。中々に激戦であつたらしく、デニスは止まったホイールの上で拍手をしていた。

「――まあ、問題はあるまい」

私はそう呟きつつも、施設管理者のところへ出向いた。――時間を作らねば。私は自分から身を挺して動く事は大嫌いだ、どうしてもやらねばならない事がある場合は別だからな。

――30分後。

「――どうも、私がこのシテイの警察組織の上役……治安維持局の長官、ジャン・ミシエル・ロジエです」

「――何だ、俺に何か用なのか」

会場からほどなく離れた地上のVIPハウス。祝勝会でライダースーツからコートに着替えた黒咲 隼は、いきなり不遜な態度をとってきた。

無理もない、優勝取材のプレスか何かだと期待していたのだろう。不機嫌が全身から溢れていた。

「……いや、昨日実はアナタのご友人のデニス君と接触をさせて頂きましてね。……まあ、アナタたちの仲間、ランサーズという組織があるという事は知っていたのですよ」

「奴は別に友という訳ではない」

ツンケンと刺々しい、黒咲。何やら苛立っているかの様子だ。

「――まあ貴方が、強い決闘者を探しているというのは分かっております。そこで、私から一つ提案があります」

「何だ」

「フレンドシップカップの参加枠を増大し、貴方方ランサーズの仲間になり得る戦力を発掘するプロモーションとしてはどうでしょう？

この私たちのいるシンクロ次元と貴方方がよぶ世界、それはこのシティの外側にも続いております。ーつまり、シティの外からも決闘者を招待するので、それまで少しお時間を頂きたい。ーそして、それまで私のところのセルゲイやデュエルチェイサー達にエクシード召還を教えてください。その代わり、我々からはチューナーモンスターを幾らか提供しますし、臨時にデュエルチェイサーの身分を与えましょう。お金も食事もこのシティの平均よりは素晴らしいものが得られますよ。正直スカウトをしたいところですが」

そう告げたところで、黒咲の眉根が動いた。

「セルゲイ……!?! あの男は貴様の部下だったのか？」

その眼、興味を示した眼ですね。

「喩え元が凶悪犯罪者でも、更正すれば立派に社会人を勤められるのが、このシティです。前歴など関係しません」

私はそう続け、ちらりと黒咲を見る。

「そしてちょうど今、セルゲイはある犯罪者を追っております……なので、協力して頂けませんかね？」

私がそう聞くと、

「ーシティの地図と、セルゲイの現在位置を教えてください」

黒咲はゆっくりと頷いた。

「GX-573地区を南下しております。シティの地図はこのUSBをデュエルディスクで読み込めばアプリケーションがインストールされます」

私がそつと手を出すと、ひったくるようにUSBを奪う黒咲。

これは、乗っつけてくれましたね。力を望むタイプは、こうも御しやすい。

「ありがとうございます。Dホイールを出しましょうか？ デュエルチェイサー用のマシンは競技用よりも高性能ですが」

そう提案するが、

「無用だ。くバニシング・レイニアス！」

黒咲は窓を開けるとそのままモンスターを召還し、飛び乗って上空へ飛翔する。

「お、おい、何処へいく黒咲！」

「黒咲い！ 折角のパーティだったのに！ こっちの御馳走全部貰っちゃうよ!?!」

権現坂とデニスがその姿を見咎めたが、

「貴様達は待っている！ 後で戻る！」

そう黒咲は告げ、飛び去っていったー。

「はあ……ロジエさん、どうしたんですかあ？ 黒咲は。なんか急いじやって変ですなあ」

こちらを見つけて、デニスが話しかけてくる。こちらを探りにきたか。

「デニス君、いやあ、惜しかったですね。ああ、私がフレンドシップカップにてこ入れをして強い決闘者を集めると言ったら、飛び出しましたのですよ。彼もまた、危険そうな人物ではなく安心してました」

「んー、まあ、彼は危険と言えば危険ですけどね」

「……ほう？」

「彼は妹を探しているんですよ。エクシーズ次元というところで、アカデミアに浚われた妹を取り戻すために戦っているのです。だから中々、棘があって僕らにも心を開こうとしないんですけど。妹の事になると、とても一生懸命で」

「なるほど……黒咲くんは妹思いのよいお兄さんなのですな。彼は荒々しいが、強い大人になるでしょう。もしもアカデミアがこの次元に攻めてきてそれを捕らえたら、捕虜を尋問してその妹さんに関する情報を聞き出す事にします。私の組織で出来る事と言えば、それくらいですからね」

そう相槌を打っておく。

ー以前の世界の情報と照らし合わせるに、デニスが浚ったという事だな。

そしてその女は、柊柚子と似ているという話だ。

赤馬零王の考える事が少し気にもなる。まさかこの次元にもその顔に似た女がいるという事か？

まあ、今の段階で考えても仕方がない。あの男の作戦を知れば優位は保てるが、今の段階で出来る事をするしかない……。

## 番外 セルゲイ VS デイアブロ ハイウェイの死闘

「私のターン。私は永続魔法、〈機甲部隊の最前線〉を発動。さらに〈AOJ・サウザンド・アームズ〉を召喚。さらにカードを3枚伏せて、ターンエンド」

セルゲイの前を走るライディングロボ……デイアブロは、電子的な合成音の混じった声で自らのターンを終える。

「AOJ……知らんテーマだな。記憶にない。だが、いきなり手札を5枚全て使うとはかなり強気ではないか」

セルゲイは前を走るデイアブロのホイールから眼を離すと、自分の手札を広げる。……ホイールに登録していたデッキがまたロジエに好き勝手に弄られている。あいつの好奇心は大概だが、せめてこちらに許可をとってからやらしてもらいたいものだ。美しくない。

「俺のターン、ドロ……メインフェイズに入る」

デイアブロがどの程度の強さまで上がったのかは知らんが……やるしかあるまい。

「来るがいい、愚かな決闘者よ」

セルゲイは相手の罵倒を無視し、そのまま加速する。

「自分フィールド上にモンスターが存在しない為、俺は手札から〈聖刻龍―トフェニドラゴン〉を特殊召喚。さらに、トフェニドラゴンをリリースし、〈聖刻龍―アセットドラゴン〉を召喚」

セルゲイはアセットドラゴンを召喚する。

「ほおう。二枚使って1900が一体か？」

「慌てるな。聖刻龍と名の付くモンスターには共通の効果が存在する。このカードがリリースされた時、自分の手札・デッキ・墓地からドラゴン族の通常モンスター1体を選び、攻撃力・守備力を0にして特殊召喚するという効果だ」

「通常モンスター？ そんなものが来たところで無駄だ！」

デイアブロはそう煽ってくる。……確かに、その意見には一理あ

る。効果モンスターが大半を占めるこのデュエルモンスターの現状……それにおいて、効果なし、バニラのモンスターに全く優位性はないという指摘。だが、世の中には「チューナーでありながら」「通常モンスターである」という物が存在するのだ。

「俺はレベル1のチューナーモンスター、ガード・オブ・フレムベルをデッキから守備表示で特殊召喚！」

灼熱の炎を纏った龍が、フィールドに降り立つ。守備力は本来2000あるが、聖刻の効果で0となっている。

「チューナーだ?!」

ディアブロが言葉に反応し、眼を光らせる。

「俺はレベル5の聖刻龍アセトドラゴンに、レベル1のガード・オブ・フレムベルを……」

「シンクロ召喚はさせせん！ この瞬間、トラップ発動！ <不協和音>！」

「何？」

不協和音ー永続罠ー

このカードがフィールド上に存在する限り、

お互いのプレイヤーはシンクロ召喚できない。

発動後3回目の自分のエンドフェイズ時にこのカードを墓地へ送る。

ディアブロの伏せた1枚がオープンされた事により、シンクロ召喚がキャンセルされた。

「ほう」

やってくれる。思ったよりも楽しめそうだ。

「ならばバトルだ！ 俺はアセトドラゴンで貴様のAOJ・サウザンド・アームズを攻撃！ 無様に消し飛ばせ！」

攻撃を命ずると同時に聖刻龍ーアセトドラゴンが咆哮しブレスを吹き、サウザンドアームズを破壊する。

「ぬ、ぬううん！ こ、この瞬間、永続魔法<機甲部隊の最前線>の効果で、サウザンドアームズの攻撃力以下のモンスターを一体俺はデッキから特殊召喚出来る！ AOJ・コアデストロイをデッキから

特殊召喚！」

ディアブロ 4000↓3800

ダメージを受け僅かに減速したディアブロだったが、まだ観念する気はないようだ。

「光モンスターを一方的に破壊するモンスターか。　　ー追撃を防ぐつもりとはな」

2枚もさらに伏せているというのに攻撃反応毘ではなかったとは不自然だがーとりあえずはまだやってみるしかあるまい。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。ディアブロといったか、つまらん探りをしていないで来るがいい」

セルゲイはエンドを宣言し、口の端を引き上げた。

セルゲイ LP4000 手札4 フィールド 聖刻龍アセットド  
ラゴン ガードオブプレムベル(守備0) 伏せ1

ディアブロ LP3800 手札0 AOJ・コアデストロイ

フィールド 機甲部隊の最前線 伏せ2+不協和音(カウント0)

番外 セルゲイ VS デイアブロ ハイウェイの  
死闘2

「ーとりあえず、私はセルゲイの様子を見るとしましょう。どうです？ デニス君も見ますか？」

私はタブレット端末を取り出すと、ハイウェイのカメラにアクセスを試みる。これは一つの策、セルゲイの強さをみせてこちらに靡かせるという手だ。

程なくして空撮カメラにアクセス出来、セルゲイとデイアブロがタブレットの液晶画面に表示された。

ゆつくりと、私は長椅子に座り込んで片手を口元に寄せ、ひよいとパネルを見せる。

「そうですね、折角ですし、それじゃ僕も見させてもらいましょう」  
カップを片手に、デニスは傍に腰掛けた。

「ーハイウェイでのライディングデュエルは、気になりますか？」  
私はそう尋ねる。

「確かにスタジアムとは勝手も違いそうで気になりますね。スリルもありますし、まあ観客が間近に見られないのは少し残念ですが……」

デニスは液晶に視線を落としたまま、そう喋る。ー純粹に、ライディング・デュエルという環境を楽しもうとしているということか。

「さて、面白くなるといいですね。セルゲイの力をみせられればよいのですが」

私はセルゲイを見た。ー奴なら、やってくれるだろう。

~~~~~

「俺のターン！ ドロー！」

ディアブロがドローする。とはいえ、現状はセルゲイのシンクロを封じたとはいえ、手札では圧倒的な損一。

セルゲイ LP4000 手札4 フィールド 聖刻龍アセトドラゴン ガードオブプレムベル(守備0) 伏せ1

ディアブロ LP3800 手札1 A O J・コアデストロイフィールド 機甲部隊の最前線 伏せ2 + 不協和音(カウント0)

「セルゲイ！ 貴様は強者であり、有象無象とは異なる力を持っていると判断できる！ だが、この俺の力をみせてやる！」

ディアブロは機械染みた音声で、セルゲイを睨む。

「俺は、＜命削りの宝札＞を発動！ 俺は手札を3枚になるようにドローする！」

「3枚ドローだと……!?!」

セルゲイの眼の奥が耀く。奴に興味を持った顔だ。

「驚いただろう。だが、今の魔法を使った事によりこのターン俺は特殊召喚が出来ず、貴様はダメージを受けないというデメリットを持つ。さらに、俺はターン終了時に手札を全て墓地に送らねばならない！」

「ーのだが、貴様は仕掛けてくるのだろうか？」

「ああ！ <強欲で謙虚な壺＞発動！ これにより俺はデッキから3枚めくり、1枚を選んで手札に加える！ 俺は<黒光りするG＞を手札に加えさせて貰う！」

「……<黒光りするG＞、なるほど。自身が墓地にいる時に除外する事により、相手のシンクロ召喚したモンスターを一度だけ破壊出来るカードか。しかも先程使った命削りの宝札により、エンドフェイズにすぐに手札を捨てて墓地に送る事が出来るようになる以上、その効果は即効性のあるものとなる……」

「ハッ、その通り！ では俺はさらにA O J・ブラインド・サッカーを

召喚！ さらにカードを1枚伏せ、バトルに入らせてもらおう！」  
「ぬう……」

「まずは目障りなアセトドラゴンに消えてもらおう！ A O J・コア  
デストロイは、光属性モンスターを無条件で戦闘時に破壊出来る！  
消えろ！」

ディアブロの命令で機械がドラゴンに取り付き、グロテスクに挟み  
千切る。

リアルソリッドビジョンの衝撃が、肌を打った。

「……しかし、貴様の宝札のデメリット効果により、俺はダメージを受  
けない」

セルゲイはまだ不敵に笑う。

「百も承知！ さらにブラインドサッカーで、邪魔なチューナーモン  
スター、ガードオブフレムベルを破壊だ！」

さらに、ブラインドサッカーが守備0のフレムベルを砕く。

「……これで貴様のフィールドは焼け野原だ。さて、力をみせてくれ  
よ？ ……ターンエンド！ 手札に先程加えたGを宝札のデメリッ  
ト効果で捨てさせてもらう！」

セルゲイ LP4000 手札4 フィールド なし 伏せ1

ディアブロ LP3800 手札0 A O J・コアデストロイ A

O Jブラインドサッカー フィールド 機甲部隊の最前線 伏せ3  
+不協和音(カウント1)